巻　頭　言

バベルの塔

稲　田　伸　一*

「全地は同じ発音，同じ言葉であった．……さあ，町と塔を建てて，その頂を天に届かせよう．……そこで彼らの言葉を乱し，互に言葉が通じないようにしよう．こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので，彼らは町を建てるのをやめた」

今年は 1946 年に最初の電子計算機 ENIAC が動き始めて丁度 30 年目に当る．この間にコンピュータは驚くべき発達をとげ，科学技術や工業の面だけでなく，航空機や新幹線あるいは電話などの日常生活に関連した部分にも深く滲透してきている．しかし，ジャーナリズムや一部のコンピュータ評論家が，鐘と太鼓をたたいたように，人間の頭脳に代るどころか近づくことさえ困難なことが判ってきた．

コンピュータを飯の種にしようかどうか迷いながら，Wilkes の原書と格闘し，EDSAC の華麗でトリッキーな Initial Order に溜息をつきながら，アッセンブラーもない機械語で四苦八苦していた 20 年前からみると，現在の多様な高級言語(?)の氾濫には一方では便利さを覚えながら，他方では戸惑いを感じる．こんなとき，ふと頭の中をかすめたのが，創世記 11 章にある有名なバベルの塔の一節である．頭脳の代りができるなどという大それた言動が神の怒りにふれて，現在のコンピュータ言語の混乱が生じたのかも知れない．

今なら一笑にも価しないが，当時真空管式で丸ビル程度の計算機があれば頭脳に代りうると真面目に話す人がいて，その真疑を聞かれて困った事があった．しかし，コンピュータの分野にはこれに類した話が多くて，一般の人の不評を買うことが多い．スイッチポン式に経営の実態が判る MIS や，電力のように自由に使えるコンピュータ・ユーティリティの話など，余りにも神をおそれぬことを言い出すと，今以上の混乱の種ともなりかねない．

何はともあれ，バベルの塔はできなかったが，人類が全地に散ったように，コンピュータの利用分野が広がった事は御同慶の至りである．しかし，学会も創立 15 年を過ぎ，会員も 9,000 名を越えて 1 万名近くなると，種々の不協和音が発生してくる．一つは学会の表の顔である学会誌に関しての意見である．現在学会員の構成は約半数が利用者，残りの半数がさらに半数ずつ，すなわち四分の一ずつが製造者と教育・研究者と考えてよいだろう．利用者と製造者のかなりの部分からの意見は集約すると「現在の学会誌は余りにも専門化し過ぎて，各分野では価値のある論文かも知れないが，部門外の人間には全く外国語である．もっと解説，講座，実施システムのケース・スタディや総合報告を充実してほしい．現在のままでは積読(ツンドク)である」につきる．一方論文投稿者からは「論文掲載の分量が少ないので仲々掲載してもらえない．また日本語では外国で認めてもらえないので，英語でのオリジナルの掲載をした方がよい」との意見で，ここでも言葉の乱れでなく，考え方の相違がでている．しかし，過去数年の学会誌の内容を調べてみると，毎号ではないにしても，それぞれの要求を満たすように編集委員会でも苦労されて，特集号なども年に数回発行され，10 年前の学会誌が一部の人のサロン雑誌であったような傾向はなくなってきている．

しかし，コンピュータの発展が余りに速く，また専門が分化しすぎて，特定の会員の目からみると，各人の興味をもつ部分は年々減少しているのも事実である．

現在，ハードウェアから OS，言語，アプリケーションの各分野でトップレベルの論文を理解できるオールラウンドプレーヤーはいないという現実から，このあたりで，学会誌の分冊を考えてみたらという提案を理事会で検討して頂いているところであるが，財政面のバランスも考える必要があり，単に理想やニーズだけで割り切れる問題でもない．

会員諸兄姉の卒直な意見を今後どしどし学会誌の編集に反映させて頂きたいと思います．

(昭和 51 年 1 月 12 日)

* 本会常務理事　日本国有鉄道情報システム部開発主幹